

# 「ディスコース・ポライトネス理論」に基づく日本語母語話者同士の初対面会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの一考察：男女・上下の要因を中心に

馮, 荷菁  
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/2559292>

---

出版情報：The Joint Journal of the National Universities in Kyushu. Education and Humanities. 6 (1/2), pp.No.5-, 2020-03-31. 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポジトリ部会  
バージョン：  
権利関係：

# 「ディスコース・ポライトネス理論」に基づく日本語母語話者同士の初対面会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの一考察

—男女・上下の要因を中心に—

馮 荷菁<sup>1</sup>

【要旨】本研究は、母語場面の初対面会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを「ディスコース・ポライトネス理論」に基づき、対話相手の性別と上下関係の要因を考慮し、「グローバルな観点」と「ローカルな観点」の2つの観点から分析した。

「グローバルな観点」からは、対異性は対同性より敬体を多用していることがわかった。また、対目下は対目上と対同等より常体を多く使用しているのに対し、対同等の場合はスピーチレベルのマーカールなしの使用が多いことが観察された。さらに、スピーチレベルのマーカールなしを除いた場合を考察した結果、マーカールなしが対同性と対異性の敬体と常体使用の有意差の有無に大きく関わっていることと、マーカールなしが対目上、対同等と対目下の敬体と常体使用の有意差に関わっていないことが明らかになった。

一方、「ローカルな観点」からは、スピーチレベル・シフトには、丁寧と感じるわけでも不愉快でもない「ニュートラル・ポライトネス効果」と、心地よく丁寧と感じる「プラス・ポライトネス効果」がある一方、特に不愉快で失礼と感じる「マイナス・ポライトネス効果」は見当たらなかった。

【キーワード】スピーチレベル、スピーチレベル・シフト、グローバルな観点、ローカルな観点、ポライトネス効果

## 1. はじめに

日本語母語話者は会話する際、対話相手との関係や場面などに応じて適切に発話文末のスピーチレベル<sup>2</sup>を選択したり、良好な人間関係構築のために適宜スピーチレベルをシフトしたりすることができる。しかし、日本語学習者は母語話者のように巧みにスピーチレベル・シフト<sup>3</sup>をしながらコミュニケーションすることは容易ではない。したがって、学習者が母語話者とうまくコミュニケーションが取れるように、母語話者の自然会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの使用実態を分析する必要がある。

---

<sup>1</sup> 所属は、九州大学大学院地球社会統合科学府大学院生である。

<sup>2</sup> 研究者によって使用する用語が異なるが、本稿では「スピーチレベル」に統一して述べる。なお、先行研究で言及される場合は元の文献の用語を用いる。

<sup>3</sup> 「スピーチレベル・シフト」の表記方法（中黒の有無）は文献によって異なる。本研究では「スピーチレベル・シフト」と表記し、先行研究に言及（引用）する際は元の文献の表記に従う。

本研究では、母語話者同士の初対面会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトを「ディスコース・ポライトネス理論」に基づき分析し、男女・上下の要因を中心に母語話者の使用規範を明らかにしたい。これにより、今後の日本語学習者のスピーチレベル学習に示唆を与えることができると考える。

## 2. ディスコース・ポライトネス理論

宇佐美 (2001a) はポライトネスを「文レベル、発話行為レベルで捉えている」(p. 24) ことを問題点の 1 つとして、文・発話行為レベルを超えた「談話」レベルの分析に重点を置くべきであるとディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness Theory: 以下、「DP 理論」) を唱えている。

### 2.1 ディスコース・ポライトネス (Discourse Politeness) の概念

宇佐美 (2001a) は、ディスコース・ポライトネスを、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である」(p. 11) と定義している。Brown & Levinson (以下、B&L) のポライトネス理論と比較して、「文/発話行為レベル」から「談話レベル」へと分析単位を拡大したのみではなく、談話行動を構成する諸要素の働きと、それら要素の機能の「総体」を主要な研究対象に包含できることが大きな特徴である。宇佐美 (2001a、2001b、2002) は具体的な分析対象として、スピーチレベルのシフト、話題導入の頻度、あいづちや終助詞の使用頻度などが挙げられている。

DP 理論は、「基本状態」をはじめ、「有標ポライトネスと無標ポライトネス」、「有標行動と無標行動」、「ポライトネス効果」、「見積もり差と行動の適切性、ポライトネス効果の関係」、「相対的ポライトネスと絶対的ポライトネス」などの 6 つのカギ概念から構成されているが、本研究では考察に用いる「基本状態」と「ポライトネス効果」の概念のみに触れる (DP 理論の詳細は宇佐美 2001a、宇佐美 2001b、宇佐美 2002、宇佐美 2008、Usami2002 などを参照されたい)。

### 2.2 「基本状態」(default)

宇佐美 (2008: 159) によると、「基本状態」には、「特定の『活動の型』における談話の『典型的な状態』である「談話の基本状態」と、「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』である「談話要素の基本状態」の 2 種類がある、とされている。後者の「談話要素の基本状態」とは、個々の研究において研究対象として設定した要素について、同定・算出するものである。具体的に、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、本研究の研究対象であるスピーチレベルの構成比率が、敬体 6 : 常体 1 : スピーチレベルのマーカーなし 3、であるのが基本状態であるという捉え方 (宇佐美 2001b) を言い、「談話内の『特定要素』

の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二者間会話においては「敬体使用率が約 6 割」であるのが基本状態であるという捉え方（宇佐美 2001a）である。

### 2.3 ポライトネス効果 (politeness effect)

宇佐美（2008）によると、「ポライトネス効果」とは「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」（p. 161）のことである。また、DP 理論によると、ある特定の「談話」の「基本状態」から離脱や回帰という言語行動の動きにより、実質的な「ポライトネス効果」が生み出される。

スピーチレベルという言語行動においては、例えば、敬体が無標スピーチレベルである初対面雑談会話では、常体を使用すること、すなわち、ダウンシフトすることが「有標行動」であると捉えられる。「ディスコース・ポライネス」の観点から、「有標行動」であるダウンシフトは「ポライトネス効果」が生み出される。

表 1 ポライトネス効果の分類項目（宇佐美 2008 を参照）

PP: Plus politeness effects	プラス・ポライトネス効果： 心地よい、丁寧だと感じるという効果
NP: Neutral politeness effects	ニュートラル・ポライトネス効果： 言語的談話効果：強調や話題転換などのように、特に 丁寧と感じるわけでも不愉快でもない効果
MP: Minus politeness effects	マイナス・ポライトネス効果： 不愉快な、失礼だと感じる効果

## 3. 先行研究

### 3.1 先行研究の概観および問題点

日本語会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトに関する先行研究は母語場面と接触場面を問わず盛んに行われている。その中で、母語場面の研究では、日本人社会人のシフトの条件生起と機能分析を中心に論じた宇佐美（1995）と、日本人大学生のスピーチレベルの分布とシフトの機能を分析した三牧（2013）が代表的である。一方、伊集院（2004）、佐藤（2000）、上仲（2005）のような接触場面を中心に分析された研究もある。

本研究では母語場面のみを研究の対象とするため、本節では母語場面の先行研究をまとめよう。問題点を提起し、3.2 節で具体的に本研究の課題を明示する。

宇佐美（1995）は母語場面のスピーチレベルのシフトをローカル要因とグローバル要因の面から分析し、ローカル要因（当該会話内の談話レベルの要因）に関して、丁寧体/敬語

使用と普通体との間のスピーチレベルのシフトに各々計 8 種の条件と機能を挙げた。しかし、それらの条件と機能を必ずしも明確に区別できるとは限らず、日本語学習者に混乱を招きかねない。その後、宇佐美 (2001a, 2001b)、Usami (2002) は DP 理論を提唱し、談話レベルのスピーチレベルを動的に捉えるという新しい視点を提示している。しかし、実際のスピーチレベル・シフトのポライトネス効果に関する実態調査はまだ少ない。

三牧 (2013) は日本人大学生の基本的スピーチレベルの設定を同学年・異学年 (上学年/下学年) という上下関係からのみ分析したが、男女という要因が基本的スピーチレベルにどのような変容をもたらすのかは分析されていない。また、日本人大学生は社会経験に欠けており、言葉遣いや社会規範などで一般の成人とは異なる部分があることも予想される。

### 3.2 本研究の課題

上記の先行研究の問題点を考慮したうえで、本研究では以下の 3 点を研究課題としたい。

- ① 日本人社会人のスピーチレベルの選択の実態とスピーチレベル・シフトの使用頻度を把握する
- ② 性別 (対同性/対異性) と上下 (対目上/対同等/対目下) の 2 つの要因を考慮し、スピーチレベルとスピーチレベル・シフトとの関係を探求する
- ③ 「有標行動」であるスピーチレベル・シフトのポライトネス効果を分析する

## 4. データおよび研究方法

### 4.1 データの基本情報

本研究では、宇佐美監修 (2018) の『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』にある「男性ベース初対面雑談 (同性目上、異性目上、同性同等、異性同等、同性目下、異性目下) 【音声付】」 (会話グループ番号 13) のデータを用いる。

当該データは、談話の中でスピーチレベルの言語行動が持つ機能と、年齢と性別の要因を、日本語の初対面二者間の自然会話の分析を通じて明らかにすることを目的としたうえで収録したものである。また、会話の収集方法・条件として、日本語母語話者 (社会人) 35 歳男性をベースとして、年上 (45 歳)・同等 (35 歳)・年下 (25 歳) の話者 (男/女) と 6 通りの会話を行っているとして設定された。本研究で用いる 18 会話の内訳を表 2 に示す。

表 2 分析データの内訳

男性ベース	話者の組み合わせ	話者の性別	話者の上下関係	会話時間
JMB001 <sup>4</sup>	JMB001-JF0015	男・女	目上	17 分 03 秒
(115 分 17)	JMB001-JM0002	男・男	目上	19 分 22 秒

<sup>4</sup> 話者記号の凡例について、JMB001 は Japanese Male Base 001、JF00015 は Japanese Female Older 0015 を表すように、J は日本語母語話者、M/F は性別、B はベース話者、O/Sa/Y は対話者の年齢の上下 (ベース話者と比較) を指す。

秒)	JMB001-JFSa015	男・女	同等	19分40秒
	JMB001-JMSa003	男・男	同等	19分45秒
	JMB001-JFY014	男・女	目下	16分43秒
	JMB001-JMY001	男・男	目下	22分44秒
JMB002 (83分19秒)	JMB002-JF0015	男・女	目上	17分09秒
	JMB002-JM0002	男・男	目上	16分38秒
	JMB002-JFSa015	男・女	同等	13分51秒
	JMB002-JMSa003	男・男	同等	14分01秒
	JMB002-JFY014	男・女	目下	9分05秒
	JMB002-JMY001	男・男	目下	12分35秒
JMB003 (100分39秒)	JMB003-JF0015	男・女	目上	19分49秒
	JMB003-JM0002	男・男	目上	19分57秒
	JMB003-JFSa015	男・女	同等	15分25秒
	JMB003-JMSa003	男・男	同等	14分57秒
	JMB003-JFY014	男・女	目下	16分56秒
	JMB003-JMY001	男・男	目下	13分35秒
合計	299分15秒			

## 4.2 分析方法

### 4.2.1 スピーチレベルとスピーチレベル・シフトの分類

Usami (2002) に基づき、発話文末のスピーチレベルを「敬体 (Polite-form、P と略)」、  
「常体 (Non-polite form、N と略)」、「丁寧度を示すマーカのない発話 (No-marker、NM  
と略)」に分類した一方、スピーチレベル・シフトを、「ダウンシフト (Down shift、D と略)」、  
「アップシフト (Up shift、U と略)」、「ノンシフト (No shift、N と略)」に分類した<sup>5</sup>。分  
類項目は表3と表4に示した通りである。

表3 発話文末のスピーチレベルの分類項目

P: Polite-form	敬体: 「です/ます」体
N: Non-Polite form	常体: 「だ/である」体
NM: No-marker	丁寧度を示すマーカのない発話: 上記の丁寧体、普通体のどちらかに分類するマーカを含まない発話文。「ええ」、「はい」などのあいづち詞や応答詞、中途終了型発話文など

<sup>5</sup> 本研究は、シフトと男女・上下の關係に焦点を当てて論じることを目的とする。シフトされた発話が「相手」の発話からのシフトか「自分」の発話からのシフトかという観点は今後の課題としたい。

表4 発話文末のスピーチレベル・シフトの分類項目

ダウンシフト (Down shift)	「です/ます」体の「敬体 (P)」から「だ/である」体の「常体 (N)」へのシフトである
アップシフト (Up shift)	「だ/である」体の「常体 (N)」から「です/ます」体の「敬体 (P)」へのシフトである
ノンシフト (No shift)	「です/ます」体の「敬体 (P)」から「敬体 (P)」へ、 「だ/である」体の「常体 (N)」から「常体 (N)」へ、とシフトがなされていないものである

#### 4.2.2 分析の方法

本研究は「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美 2001、2002、2008、Usami2002 等)に基づき、大きく「グローバルな観点」と「ローカルな観点」とに分けて分析する。

まず、「グローバルな観点」からは、以下の手順に従い量的な集計を行う。

- 1) 4.2.1 節の分類方法に従い、発話文末のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトについて「コーディング」作業を行う
- 2) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2019年改訂版)」を用い、スピーチレベルの分布 (3つのスピーチレベルの分布と、マーカーなしを除いた (敬体と常体のみ) スピーチレベルの分布とに分ける) とスピーチレベル・シフトの頻度を集計する
- 3) Usami (2002) に基づき、「無標スピーチレベル」<sup>6</sup>を同定する。「無標スピーチレベル」が同定できない場合、「基本的スピーチレベル」<sup>7</sup>を同定する
- 4) 上記2) の作業後、さらに対同性/異性、対目上/同等/目下におけるスピーチレベルの分布とスピーチレベル・シフトの頻度を集計する。対同性/異性と対目上/同等/目下との間に有意差があるか否かを調査し、カイ二乗検定で有意差検定を行う
- 5) 有意差検定を通して、男性ベースのスピーチレベルの分布の傾向とシフトの使用傾向を分析する。さらに、宇佐美 (2001b) の女性ベースと比較対照して考察する

また、「ローカルな観点」からは、スピーチレベル・シフトが生起した会話例を抽出し、「無標スピーチレベル」あるいは「基本的スピーチレベル」からの離脱や回帰という言語行動の動きによって引き起こされる「ポライトネス効果」(宇佐美 2008) を考察する。

<sup>6</sup> 宇佐美 (2001) は主要スピーチレベル (使用率が最も高いもの) の使用率が50%を超えると「無標スピーチレベル」と同定できるが、50%を超えないと明確な無標スピーチレベルが存在しないと述べている。

<sup>7</sup> 基本的スピーチレベルが談話全体に占める割合は、スピーチレベルを何種類に分類するかといった操作的な問題によって異なる。三牧 (2013) によると、もし中途終了文を除くと、丁寧体と普通体の2種類の分布の中に、50%以上を占める方のスピーチレベルが基本的スピーチレベルとなる。一方、中途終了文も含めて分布を示すのであれば、「当該談話の最も頻度の高いスピーチレベル」(p. 86) が基本的スピーチレベルである、と述べている。

## 5. 「グローバルな観点」からの分析と結果

本節では「グローバルな観点」から母語場面のスピーチレベルの分布とスピーチレベル・シフトの頻度を数量的に検証した後、スピーチレベルの分布とシフトの傾向を分析する。

### 5.1 スピーチレベルの分布

本節では、日本語母語場面の初対面雑談全 18 会話におけるスピーチレベルの分布を、3 つのスピーチレベル（敬体、常体、スピーチレベルのマーカークなし）の分布状況と、スピーチレベルのマーカークなしを除いた（敬体と常体のみ）スピーチレベルの分布状況とに分けて数量的に検証する。さらに、2 つの分布状況を比較することにより、「マーカークなし」の機能を考察する。

#### 5.1.1 全体およびベース側・対話者側のスピーチレベルの分布

図 1 は 18 会話の全体のスピーチレベル（3 つ）の分布状況（ベース側と対話者側別を含む）を示したものである。図 2 はスピーチレベルのマーカークなしを除いた（敬体と常体のみ）分布状況（ベース側と対話者側別を含む）を示したものである。

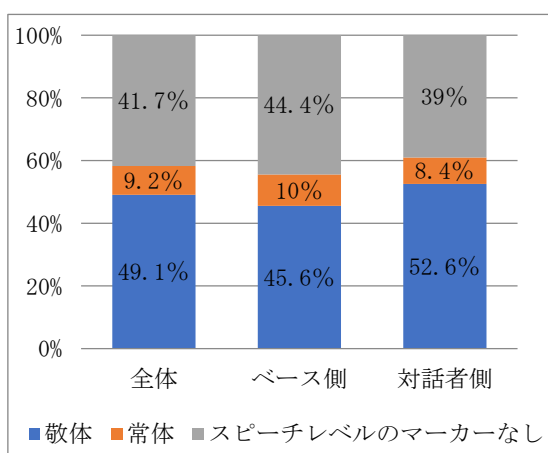


図 1 母語場面の初対面雑談におけるスピーチレベル（3 つ）の分布状況

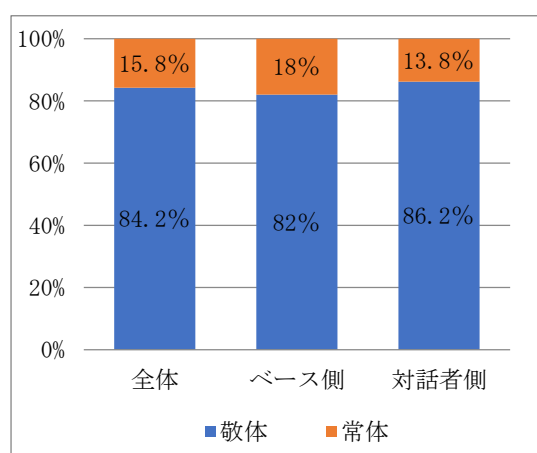


図 2 母語場面の初対面雑談における敬体と常体の分布状況

まず、3 つのスピーチレベルの分布状況である。

図 1 からみると、対話者側のみ敬体の使用が 50%を超えていることがわかった。すなわち、Usami (2002) に従うと、全体の敬体（49.1%）とベース側（45.6%）の敬体は「無標スピーチレベル」として同定できない。したがって、三牧（2013: 86）の「基本的スピーチレベル」（「当該談話の最も頻度の高いスピーチレベル」）を用い、18 会話の基本的スピーチレベルは「敬体」と同定できる（4.2.2 節の分析方法 3）を参照）。

図 1 を参照すると、対話者側はベース側より敬体の使用が多く、常体と丁寧度を示すマ



一カーなしの使用がより少ないことがわかった。これらの3つのスピーチレベルの出現回数をカイ二乗検定で分析した結果と残差分析の結果を、以下の表5に示した。

表5 ベース側と対話者側のスピーチレベルの出現回数に関する  
カイ二乗検定と残差分析の結果<sup>8</sup>

カイ二乗検定	話者	値	敬体	常体	マーカーなし
	ベース側		実測値	1200	263
		期待値	1292.283	242.178	1099.539
対話者側		実測値	1388	222	1031
		期待値	1295.717	242.822	1102.461
	$\chi^2$ の結果	$\chi^2(2) = 26.015, p < .01$		Cramer's V 係数	0.070
残差分析	話者	結果	敬体	常体	マーカーなし
	ベース側	調整された残	-5.083**	1.984*	3.990**
	対話者側	差と検定結果	5.083**	-1.984*	-3.990**
	ベース側	実測値と残差	1200 ▽	263 ▲	1171 ▲
	対話者側	分析の結果	1388 ▲	222 ▽	1031 ▽

表5によると、ベース側と対話者側の3つのスピーチレベルの出現回数に1%の有意水準で有意であった ( $\chi^2(2) = 26.033, p < .01$ )。なお、残差分析の結果では、敬体の使用については、対話者側はベース側より有意に多く使用していることがわかった。また、常体とスピーチレベルのマーカーなしの使用については、ベース側は有意に多く使用していることが確認できた。

上記の結果から、母語話者同士の会話であっても、ベース側（異なる複数の話者と会話する側）と対話者側の使用するスピーチレベルの頻度に差異があることが観察された。

また、スピーチレベルのマーカーなしを除いた敬体と常体のみの分布状況である。

図2をみると、ベース側と対話者側を問わず、全ての話者の敬体使用率が8割を超えていることがわかった。また、ベース側と対話者側の敬体と常体の使用回数を有意差検定で行った結果、1%の有意水準で有意であった ( $\chi^2(1) = 9.801, p < .01$ )<sup>9</sup>。なお、残差分析の結果、ベース側は有意に常体を多く使用しているのに対し、対話者側は有意に敬体を多く使用していることがわかった。すなわち、3つのスピーチレベルの分布状況（表5）と同様な結果が得られた。

図2を参考すると、Usami (2002) に従うと、初対面雑談の「無標スピーチレベル」は敬

<sup>8</sup> 残差分析の符号の意味について、+p < .10 (10%の有意水準)、\*p < .05 (5%の有意水準)、\*\*p < .01 (1%の有意水準)、ns (.10 < p であり、有意差が認められない)を示す。また、▲は有意に多い、▽は有意に少ないことを指す。なお、本研究の全ての残差分析は p < .05 の水準で有意である。

<sup>9</sup> マーカーなしを除いた場合で行った有意差検定と残差分析は、紙幅のため省略した。以下も同様。

体であることが明らかになった。この点は、日本語における初対面会話では基本的に敬体を使用するという社会言語学的な規範に従うことを裏付けられよう。

さらに、図 1 と図 2 を比較してみると、スピーチレベルのマーカールなしを除くか否かによって、敬体使用率の分布が大きく異なっていることが観察できた。このことから、スピーチレベルのマーカールなしの使用は、初対面会話の「無標スピーチレベル」を左右する要因であることがわかった。しかし、図 1 では最も頻度の高いスピーチレベルは敬体である点から、マーカールなしは「基本的スピーチレベル」を左右しにくいことが言えよう。

### 5.1.2 対同性・対異性のスピーチレベルの分布

図 3 はベース側の対同性と対異性の会話（それぞれ 9 会話ずつ）に現れるスピーチレベル（3 つ）の分布状況を示したものである。図 4 はベース側の対同性と対異性の会話（それぞれ 9 会話ずつ）に現れるスピーチレベルのマーカールなしを除いた（敬体と常体のみ）分布状況を示したものである。

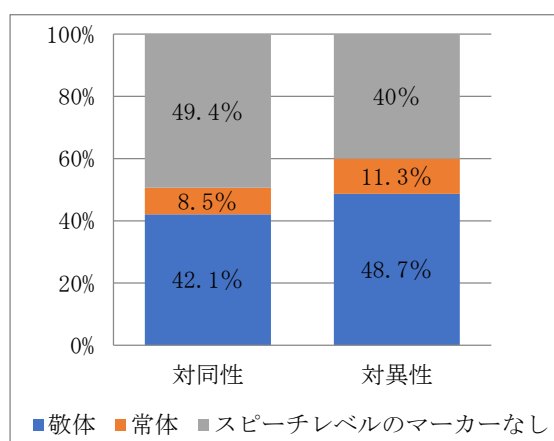


図 3 ベース側の対同性・対異性に現れるスピーチレベル（3 つ）の分布状況

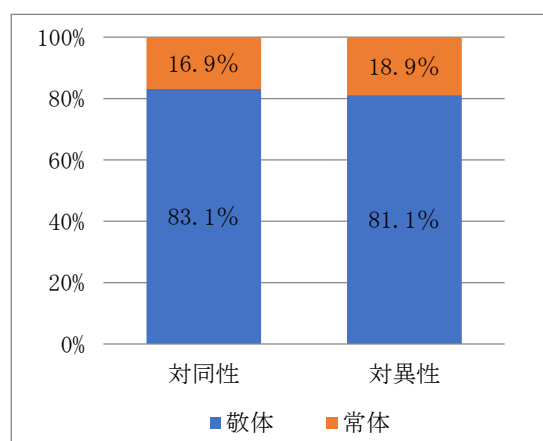


図 4 ベース側の対同性・対異性に現れる敬体と常体の分布状況

まず、3 つのスピーチレベルの分布状況である。

図 3 を参照すると、ベース側は対同性より対異性のほうが敬体の使用率が高いことがわかった。これらのスピーチレベルの出現回数をカイ二乗検定で分析した結果と残差分析の結果を、以下の表 6 に示した。

表 6 対同性と対異性のスピーチレベルの出現回数に関するカイ二乗検定と残差分析の結果

カイ二乗	性別	値	敬体	常体	マーカールなし
	対同性				
	実測値		522	106	613

検定		期待値	565.418	124.288	551.294
	対異性	実測値	679	158	558
		期待値	635.582	139.712	619.706
	$\chi^2$ の結果	$\chi^2(2) = 24.436, p < .01$		Cramer's V 係数	0.096
残差分析	性別	結果	敬体	常体	マーカ-なし
	対同性	調整された残	-3.402**	-2.377*	4.846**
	対異性	差と検定結果	3.402**	2.377*	-4.846**
	対同性	実測値と残差	522 ▽	106 ▲	613 ▲
	対異性	分析の結果	679 ▲	158 ▽	558 ▽

表 6 を参照すると、男性ベースは対同性と対異性に使用する 3 つのスピーチレベルの回数に 1% の有意水準で有意であった ( $\chi^2(2) = 24.436, p < .01$ )。なお、残差分析の結果では、敬体の使用については、対異性は対同性より有意に多く使用していることがわかった。また、スピーチレベルのマーカ-なしの使用については、対同性の場合に有意に多く使用していることがわかった。

上記の結果から、ベース側は異性に対して会話する場合、丁寧度の高い敬体を使用している傾向があるのに対し、同性に対してはスピーチレベルのマーカ-なしを使用している傾向があることが観察された。すなわち、ベース側は対同性と対異性の場合に使用されるスピーチレベルの頻度に差異があると言えよう。

また、スピーチレベルのマーカ-なしを除いた敬体と常体のみ分布状況である。

図 4 をみると、対同性と対異性を問わず、全てのベース側は敬体使用率が 8 割を超えていることがわかった。ベース側の対同性と対異性の敬体と常体の使用回数を有意差検定で行った結果、有意差が認められなかった ( $\chi^2(1) = 0.839, ns$ )。これにより、マーカ-なしを除いた場合、対同性と対異性の敬体と常体使用に相違がみられないことがわかった。

さらに、図 3 と図 4 を比較すると、スピーチレベルのマーカ-なしが対同性と対異性の敬体と常体使用の有意差の有無に大きく関わっていることが観察できた。このことから、スピーチレベルのマーカ-なしの使用は、対同性・対異性という男女差を左右する要因であることが言えよう。

### 5.1.3 対目上・対同等・対目下のスピーチレベルの分布

図 5 はベース側の対目上、対同等と対目下の会話（それぞれ 6 会話ずつ）に現れるスピーチレベル（3 つ）の分布状況を示したものである。図 6 はベース側の対目上、対同等と対目下の会話（それぞれ 6 会話ずつ）に現れるスピーチレベルのマーカ-なしを除いた（敬体と常体のみ）分布状況を示したものである。

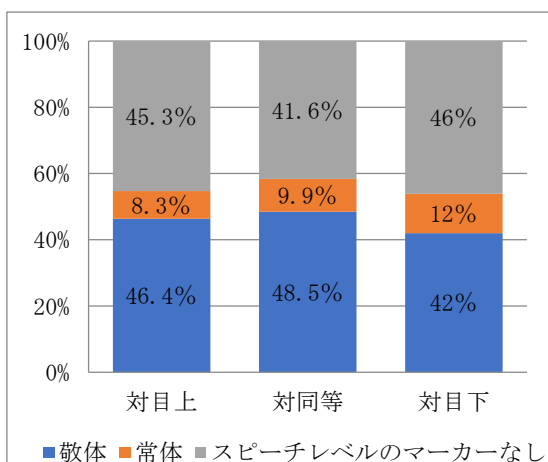


図5 ベース側の対目上・対同等・対目下に現れるスピーチレベル(3つ)の分布状況

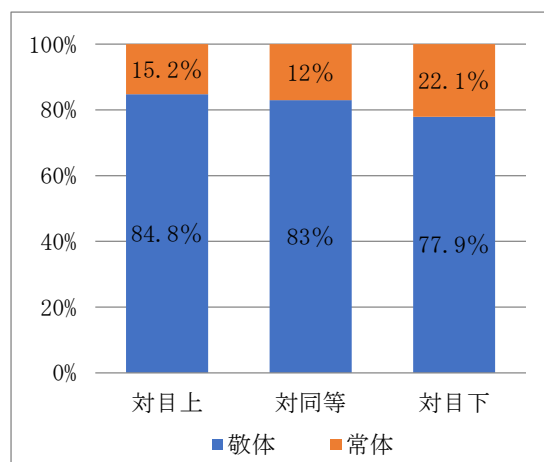


図6 ベース側の対目上・対同等・対目下に現れる敬体と常体の分布状況

まず、3つのスピーチレベルの分布状況である。

図5をみると、ベース側は対目下の場合、敬体の使用率が最も低く、常体の使用率が最も高いことがわかった。これらのスピーチレベルの出現回数をカイ二乗検定で分析した結果と残差分析の結果を、以下の表7に示している。

表7 対目上、対同等、対目下のスピーチレベルの出現回数に関するカイ二乗検定と残差分析の結果

	上下関係	値	敬体	常体	マーカーなし
	カイ二乗検定	対目上	実測値	439	79
期待値			431.467	94.844	420.689
対同等		実測値	395	81	339
		期待値	371.326	81.624	362.050
対目下		実測値	367	104	403
		期待値	398.207	87.533	388.260
	x <sup>2</sup> の結果	x <sup>2</sup> (4) = 12.027, p < .05		Cramer's V 係数	0.048
残差分析	上下関係	結果	敬体	常体	マーカーなし
	対目上	調整された残差と検定結果	0.614 ns	-2.143*	0.679 ns
			2.003*	-0.088 ns	-1.955+
			-2.592**	2.269*	1.227 ns
	対目下	実測値と残差分析の結果	439	79 ▽	429
			395 ▲	81	339
			367 ▽	104 ▲	403

表 7 によると、男性ベースは対目上、対同等と対目下に使用する 3 つのスピーチレベルの回数に 5%の有意水準で有意であった ( $\chi^2(4) = 12.027, p < .05$ )。なお、残差分析の結果では、敬体の使用については、対同等の場合は有意に多く使用しているのに対し、常体の使用については、対目下の場合は有意に多く使用していることがわかった。また、対目上の場合は常体の使用が有意に少ないのに対し、対目下の場合は敬体の使用が有意に少ないことが観察された。

すなわち、目上に対する場合は丁寧度の高い敬体を多く使用しており、目下に対する場合は常体を多く使用していることから、日本の社会言語学的規範が裏付けられるのではないか。結果をまとめると、ベース側は対話者側との上下関係によって、実際に使用するスピーチレベルの頻度に差異があることが観察された。

また、スピーチレベルのマーカーなしを除いた敬体と常体のみの分布状況である。

図 6 をみると、対目上、対同等と対目下を問わず、全てのベース側は敬体使用率が 75%を超えていることがわかった。そして、ベース側は対目上、対同等と対異性の敬体と常体の使用回数を有意差検定で行った結果、5%の有意水準で有意であった ( $\chi^2(2) = 8.270, p < .05$ )。なお、残差分析の結果、ベース側は対目上の場合敬体を有意に多く使用しており、常体を有意に少なく使用していることと、対目下の場合常体の使用が有意に多く、敬体の使用が有意に少ないことがわかった。

さらに、図 5 と図 6 を比較すると、スピーチレベルのマーカーなしを除くか否かは、ベース側の対目上、対同等と対目下の敬体と常体使用の有意差に関わっていないことが観察できた。このことから、スピーチレベルのマーカーなしの使用は、対目上・対同等・対目下という上下差を左右する要因ではないことが言えよう。

## 5.2 スピーチレベル・シフトの頻度

### 5.2.1 全体およびベース側と対話者側のスピーチレベル・シフトの頻度

図 7 は全 18 会話におけるスピーチレベル・シフトの使用頻度の状況と、ベース側と対話者側の使用するスピーチレベル・シフトの頻度を表したものである。

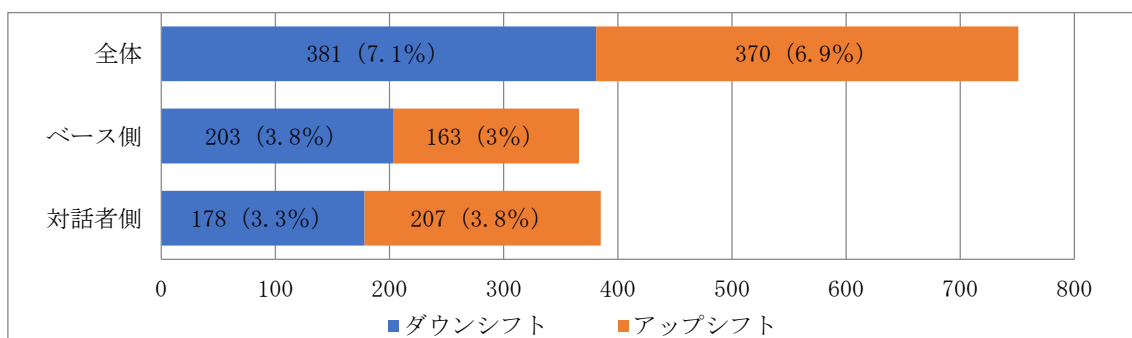


図 7 母語場面の初対面雑談におけるスピーチレベル・シフトの頻度

図 7 を参照すると、全体的にダウンシフトとアップシフトの使用頻度がほぼ同程度であることが観察された。しかし、ベース側と対話者側に分けてみると、ベース側はダウンシフトの使用がより多く、対話者側はアップシフトの使用が多いことがわかった。これらの使用頻度をカイ二乗検定で分析した結果と残差分析した結果を以下の表 8 に示した。

表 8 ベース側と対話者側のスピーチレベル・シフトの頻度に関する  
カイ二乗検定と残差分析の結果

カイ 二乗 検定	話者	値	ダウンシフト	アップシフト
	ベース側		実測値	203
		期待値	185.680	180.320
対話者側		実測値	178	207
		期待値	195.320	189.680
	x <sup>2</sup> の結果	x <sup>2</sup> (1) = 6.032, p<.05	Phi 係数	0.090
残差 分析	話者	値	ダウンシフト	アップシフト
	ベース側	調整された残差と 検定結果	2.529*	-2.529*
	対話者側		-2.529*	2.529*
	ベース側	実測値と残差分析の 結果	203 ▲	163 ▽
	対話者側		178 ▽	207 ▲

表 8 によると、ベース側と対話者側のスピーチレベル・シフトの使用数の差は 5%の有意水準で有意であった ( $x^2(1)=6.032, p<.05$ )。なお、残差分析の結果では、ベース側はダウンシフトを有意に多く使用しており、アップシフトを有意に少なく使用していることが判断できた。一方、対話者側はベース側と正反対であり、アップシフトの使用が有意に多く、ダウンシフトの使用が有意に少ないことが判断できた。このことから、ベース側はダウンシフトを用い、対話者側と良好な関係を築こうとする意志がより強かったのではないかと考えられる。以上の結果から、スピーチレベル・シフトの使用について、ベース側と対話者側の間に差異があることがわかった。

### 5.2.2 対同性・対異性のスピーチレベル・シフトの頻度

図 8 はベース側の対同性と対異性の会話（それぞれ 9 会話ずつ）に現れるスピーチレベル・シフトの使用頻度を示している。

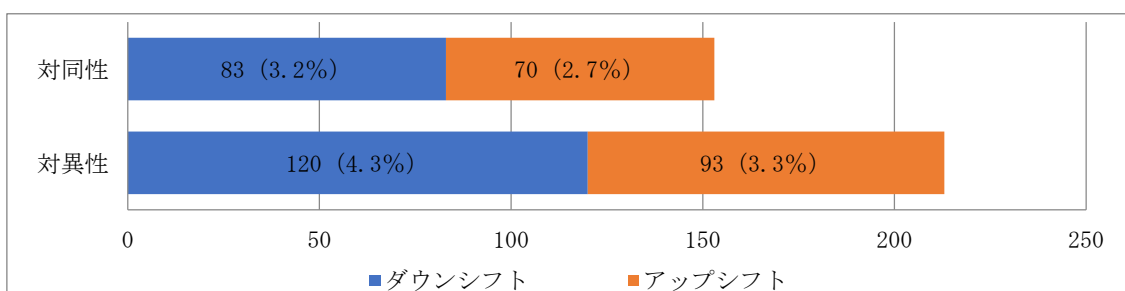


図8 ベース側の対同性・対異性に現れるスピーチレベル・シフトの頻度

表9 対同性と対異性のスピーチレベル・シフトの頻度に関するカイ二乗検定の結果

カイ二乗検定	話者	値	ダウンシフト	アップシフト
	対同性	実測値		83
期待値			84.861	68.139
対異性	実測値		120	93
	期待値		118.139	94.861
x <sup>2</sup> の結果		x <sup>2</sup> (1) = 0.084, ns	Phi 係数	0.015

図8を参照すると、男性ベースは対同性より対異性のほうがダウンシフトもアップシフトも多いことがわかる。表9から、これらの出現回数をカイ二乗検定で分析した結果、有意差が認められなかった ( $x^2(1) = 0.084, ns$ )。すなわち、ベース側は対同性と対異性の場合に使用されるスピーチレベル・シフトの頻度に差異がみられないことが観察された。

### 5.2.3 対目上・対同等・対目下のスピーチレベル・シフトの頻度

図9はベース側の対目上、対同等と対目下の会話（それぞれ6会話ずつ）に現れるスピーチレベル・シフトの使用頻度を示している。

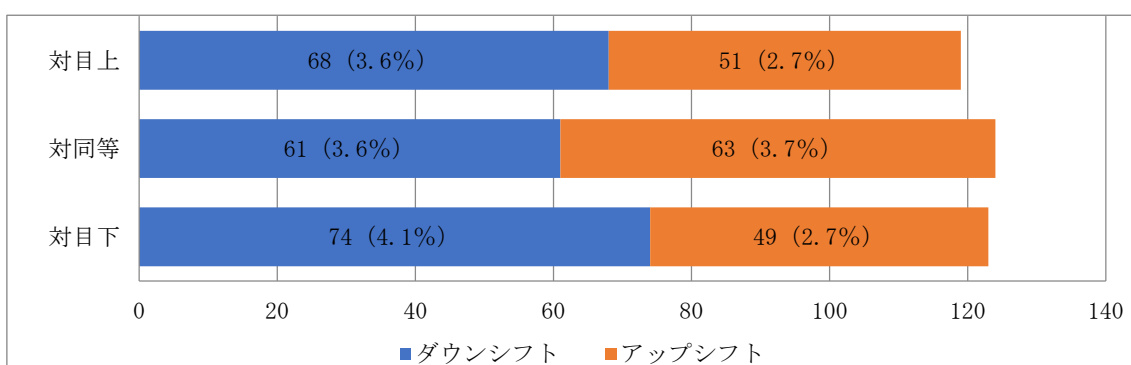


図9 ベース側の対目上・対同等・対目下に現れるスピーチレベル・シフトの頻度

図 9 をみると、ベース側は対目上・対同等より対目下のほうがダウンシフトの使用がやや多いことがわかる。これは対目下の場合、敬体の使用が最も少なく、常体の使用が最も多いことから裏付けられよう（図 5 と図 6 を参照）。そして、これらの出現頻度をカイ二乗検定で行った結果を以下の表 10 に示す。

表 10 対目上、対同等、対目下のスピーチレベル・シフトの頻度に関するカイ二乗検定の結果

	話者	値	ダウンシフト	アップシフト
カイ 二乗 検定	対目上	実測値	68	51
		期待値	66.003	52.997
	対同等	実測値	61	63
		期待値	68.776	55.224
	対目下	実測値	74	49
		期待値	68.221	54.779
	x <sup>2</sup> の結果	x <sup>2</sup> (2) = 3.209, ns	Cramer's V 係数	0.094

表 10 から、これらのスピーチレベル・シフトの出現回数をカイ二乗検定で分析した結果、有意差が認められなかった ( $x^2(2) = 3.209, ns$ )。すなわち、男性ベースは対目上・対同等・対目下で使用されるスピーチレベル・シフトの頻度に差異がみられないことが観察された<sup>10</sup>。

### 5.3 女性ベースの結果との比較対照

本節では、宇佐美 (2001b) における女性ベースの分析結果と比較対照して、考察することによって、男性ベースと女性ベースのスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの使い分けの共通点と相違点について考察する。

#### 5.3.1 男性ベースと女性ベースの使用するスピーチレベルの比較

まず、スピーチレベルのマーカールを含む場合のスピーチレベルを見てみよう。

宇佐美 (2001b) は、女性ベースは対話相手の年齢、性に関わりなく、尊敬語等を含む発話 (S)<sup>11</sup>、敬体を含む発話 (P)、丁寧度を示すマーカールのない発話 (NM) を用いているが、常体を含む発話 (N) のみは目下に対して有意に多く使用していることが提示されている。また、このことから、「対話相手との力関係 (年齢、社会的地位) を顕著に反映しているのは、尊敬語等の使用ではなく、常体の使用であることが分かる」(p. 11) と述べ、「初対面

<sup>10</sup> 本研究の 18 会話に限った結果であるため、データを増やすと結果が異なる可能性が考えられる。

<sup>11</sup> 宇佐美 (2001b: 7) によると、S は Super-polite-form (尊敬語・謙譲語、られる、わたくし等を含む発話) の略であり、P は Polite-form (敬体を含む発話) の略であり、N は No-polite-form (常体を含む発話) の略であり、NM は No-marker (丁寧度を示すマーカールのない発話。中途終了型発話等) の略である。



の会話においては、目上の人により多く敬語を使うのではなく、目下の人により多く常体を使うという傾向が顕著である」(p. 11)ということが明らかになった。

一方、5.1.2節では、男性ベースは異性に対して会話する場合、丁寧度の高い敬体を使用している傾向があるのに対し、同性に対してはスピーチレベルのマーカークなしを使用している傾向があることが観察された。また、5.1.3節では、敬体の使用については、対同等の場合は有意に多く使用しているのに対し、常体の使用については、対目下の場合は有意に多く使用していることがわかった。そして、対目上の場合は常体の使用が有意に少ないのに対し、対目下の場合は敬体の使用が有意に少ないことが観察された。

上記の男性ベースと女性ベースのすべてのスピーチレベルを比較対照した結果、上下差に関しては、初対面会話では目下に対しては常体を有意に多く使用していることが共通点として挙げられる。また、男女差に関しては、以下のような相違点がまとめられる。宇佐美(2001b)は年齢・社会的地位の評定結果に男女差がないにもかかわらず、女性のほうが男性より尊敬語等を含む発話を有意に多く用いていたと結論付けている。それに対し、本研究では、男性ベースは対同性より対異性のほうが敬体を多く使用している一方、対同性はスピーチレベルのマーカークなしを使用している傾向があることが示される。

また、スピーチレベルのマーカークを除いた結果を見てみよう。

宇佐美(2001b)によると、女性ベースは、丁寧度を示すマーカークのない発話を除外しても、「すべての発話を分析対象とした場合と同様に、目下の対話者に対して常体を含む発話(N)をより多く用いるという結果のみが有意であった」(p. 16)と結論付けている。

一方、5.1.2節では、スピーチレベルのマーカークなしを除いた場合、男性ベースの対同性と対異性の敬体と常体使用に有意差がみられないことがわかった。また、5.1.3節では、男性ベースは対目上の場合敬体を有意に多く使用しており、常体を有意に少なく使用していることと、対目下の場合常体の使用が有意に多く、敬体の使用が有意に少ないことが観察された。

上記の男性ベースと女性ベースのスピーチレベルのマーカークを除いたスピーチレベルを比較対照した結果、上下差に関しては、初対面会話では目下に対しては常体を有意に多く使用していることが共通点として挙げられる。また、上下差に関する相違点は以下のようにまとめられる<sup>12</sup>。宇佐美(2001b)はすべての発話を分析対象とした場合と同様に、目下の対話者に対して常体を含む発話(N)をより多く用いるという結果のみが有意であったと結論付けている。それに対し、男性ベースは対目上の場合敬体を有意に多く使用しており、常体を有意に少なく使用していることと、対目下の場合常体の使用が有意に多く、敬体の使用が有意に少ないことが観察された。

---

<sup>12</sup> 男女差に関しては宇佐美(2001b)が言及されていない。また、本研究では、男性ベースは対同性と対異性の敬体と常体の使用に有意差がみられない(5.1.2節を参照)ため、ここでは男女差について言及しないこととした。

### 5.3.2 男性ベースと女性ベースの使用するスピーチレベル・シフトの比較

宇佐美 (2001b) によると、ダウンシフトに関しては、女性ベースは対目上との会話において、対同等と対目下との会話より有意にダウンシフトが少ないという結果が得られた。また、アップシフトに関しては、目上の相手に対して、同等と目下の相手より有意に多く、そして、目下に対して同等の相手より有意に多く用いられていたことがわかった。

一方、5.2.1 節では、全体的に、男性ベースはダウンシフトを有意に多く使用しており、アップシフトを有意に少なく使用していることが判断できた。しかし、5.2.2 節では、男性ベースは対同性と対異性の場合に使用されるスピーチレベル・シフトの頻度に有意差がみられない ( $\chi^2(1) = 0.084, ns$ ) ことが観察された。そして、5.2.3 節では、男性ベースは対目上・対同等・対目下で使用されるスピーチレベル・シフトの頻度に有意差がみられない ( $\chi^2(2) = 3.209, ns$ ) ことが観察された。

まとめると、宇佐美 (2001b) の女性ベースの使用するスピーチレベル・シフトは対話者側との上下関係と有意関係を持たれるのに対し、本研究の男性ベースの使用するスピーチレベル・シフトは対同性・対異性も対目上・対同等・対目下も有意差が認められなかった<sup>13</sup>。

## 6. 「ローカルな観点」からの分析

図 1 におけるスピーチレベルの分布状況により、敬体 (P) が「基本的スピーチレベル」であることがわかった。その結果、常体 (N) を使用すること、すなわち、ダウンシフトすることが「有標行動」であると捉えられる。本節では、「有標行動」であるダウンシフトを取り上げ、会話中における「ポライトネス効果」(2.3 節を参照) を「ローカルな観点」から分析していく。

### 6.1 対異性、対目上

例 1) 会話通し番号：173-13-JMB001-JF0015-男女-目上

発話文 番号	発話文 終了	話者	発話内容	スピーチ レベル	シフ ト
26-1	/ <sup>14</sup>	JMB001	<いや、>{>}今日から、夏休みじゃないですか、	x	
27	*	JF0015	あー、<そうですね>{<}。	P	
26-2	*	JMB001	<子供たちは>{>}。	x	
28	*	JMB001	ですから(うーん)、混んでるのかなと思ってたんですけどね。	P	
29	*	JF0015	うーん。	NM	

<sup>13</sup> この結果について、今後調査データを増やして再検討することが必要であると考えられる。

<sup>14</sup> 本研究で抽出した文字化資料の会話例はすべて宇佐美 (2015) の文字化原則に従う。なお、具体的な符号は宇佐美 (2015) を参照。

30	*	JF0015	高速道路はね(あ)、ずいぶん渋滞してたくみたいですけどね>{<}	P	
31	*	JMB001	<そう>{<}ですか。	P	
32	*	JF0015	<u>でも、電車の中は、そんなに小さい子(あっ)いなくて。</u> <sup>15</sup>	N	D
33	*	JMB001	そうですね[囁くように]、へー。	P	U
34	*	JF0015	<笑い>。	NM	
35	*	JMB001	<笑い>うーん。	NM	

例 1) は夏休みの期間中の交通状況について話している場面である。発話文番号 28 では、夏休みの間は混んでいることが予想された後 (JMB001)、女性・目上の JF0015 はそれぞれ高速道路の渋滞 (発話文番号 30) と電車の状況 (発話文番号 32) という話を引き出したのである。上記の例文から、発話文番号 31 から 32 までは目上によるダウンシフトが生起していることがわかる。そして、すぐ後の 33 でベース話者が敬体の「そうですね」を発話していることがわかる。この例は目上からダウンシフトして相手側と親しくなるうとしているにもかかわらず、目下のベース話者は依然として敬体を使用して目上への常体の使用を控えているという初対面会話の規範が伺える。敬体の使用を維持しながらも、目上からのダウンシフトに合わせた非言語の形 (最後の 2 つの音声的な笑い) から、そのダウンシフトは心地よく感じられる「プラス・ポライトネス効果」があると考えられる。

## 6.2 対異性、対同等

例 2) 会話通し番号 : 187-13-JMB003-JFSa015-男女-同等

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	スピーチレベル	シフト
170	*	JMB003	だから、日本でも、なんか旅行するってゆくと、1 番、どこに行きたいのって、沖縄なんですよ。	P	
171-1	/	JFSa015	あ、はいはい<はい、あー、分かります>{<},,	x	
172	*	JMB003	<なんとなく、イメージが>{<}<笑い>。	NM	
171-2	*	JFSa015	分かりますー。	P	
173	*	JFSa015	<u>私もーそう、どっちかとゆくと、そうだな、&lt;うーん&gt;{&lt;}</u> 。	N	D
174	*	JMB003	<えー>{<}。	NM	
175	*	JFSa015	そうですね、あの一、な一にをあくせくしてるんだろ うって感じになりますよね<笑いながら>。	P	U

<sup>15</sup> 下線部は発話末が常体 (N) であることを指す。

176	*	JMB003	<笑い>。	NM	
177	*	JFSa015	<笑い>、うーん。	NM	

例 2) は旅行の話を通して話題が展開している場面である。一番旅行に行きたいところは沖縄だというベース話者の話（発話文番号 170）に対して、同感の表現がみられる（「分かりますー。）。また、同感を示した後、JFSa015 の意見を述べる前に、「私もーそう、どっちかとゆうと、そうだな」という言い淀んだ発話が見られ、聞き手目当て性<sup>16</sup>の低い発話であることから、常体を使用してシフトが起こっているわけである。その後、発話文番号 175 では、「そうですね、あの一、なーにをあくせくしてるんだろうって感じになりますよね<笑いながら>。」のように再び敬体に戻りアップシフトを生起していることが観察された。発話文番号 171-1 から 172 までのダウンシフトは、聞き手目当て性が低く次に続く発話の時間を要求するものであるため、対話相手に必ずしも不愉快とも丁寧だとも思われなような「ニュートラル・ポライトネス効果」を持っていると考えられる。

### 6.3 対異性、対目下

例 3) 会話通し番号：183-13-JMB002-JFY014-男女-目下

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	スピーチレベル	シフト
59	*	JFY014	小さい頃から、じゃあのあたりで、だいぶん変わりましたか？。	P	
60	*	JMB002	そうですね、昔は畑ばかりだったんですけどね(あそうなんですか)、今は家ばかりですよ。	P	
61	*	JFY014	<あー>{<}&#x27E9;。	NM	
62	*	JMB002	<畑>{&#x27E9;}ばかりってということもないかな。	N	D
63	*	JMB002	畑があったんだけどな。	N	
64	*	JFY014	ふーん。	NM	
65	*	JMB002	でもそんなにあったというほどでもない{<}&#x27E9;。	N	
66	*	JFY014	<##の方>{&#x27E9;}とか、だいぶん変わりました？。	P	U
67	*	JFY014	昔に比べて…。	NM	
68	*	JMB002	そうですね{<}&#x27E9;。	P	

<sup>16</sup> 「聞き手目当て性」を使用して分析した研究が数多くみられる。具体的な説明については、李（2003）に詳しい。李（2003）は聞き手目当て性の有無を「聞き手志向的なもの」と「聞き手志向的でないもの」とに分けた。李（2003: 88）によると、「聞き手志向的なもの」とは「話し手が聞き手に向け、意図的に非デスマス形式を用いること」であり、「聞き手志向的でないもの」とは「話し手が背景情報提供を目指す過程で非デスマス形式が用いられるなど、聞き手に向けられていないこと」である、とされている。

例3)は昔の町の様子について話している場面である。小さいころの町の様子を尋ねた後、「そうですね、昔は畑ばかりだったんですけどね(あそうなんですか)、今は家ばかりですよ。」と発話した。そして、発話文番号62と63では、「<畑>{}ばかりってということもないかな。」と「畑があったんだけどな。」のような自己発話修正が行われ、自分に対する独話的発話の性質が濃く、聞き手目当てではないことから、常体へのシフトが生じているのである。その後の65でも、「でもそんなにあったというほどでもない{}。」のように常体が維持された様子が伺える。例3)でみられる常体の使用は、過去の物事に関する記憶を喚起する際に用いられる自己発話のようなものであるため、このダウンシフトには、丁寧でも不愉快でもない「ニュートラル・ポライトネス効果」を有すると考えられる。

#### 6.4 対同性、対目上

例4) 会話通し番号：174-13-JMB001-JM0002-男男-目上

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	スピーチレベル	シフト
128	*	JM0002	もう、あの韓国にも、まあものを売ったりも(うんうん)するわけなんですけども(はい)、どうしてもその、にっ、日韓のっていうとあれですけどね、(はい)あの貿易の、がアンバランスなんですよ。	P	
129	*	JMB001	はい。	NM	
130	*	JM0002	日本の製品を売る一方なん(はい)ですよ。	P	
131-1	/	JM0002	だから、あの一、そういったあ一、(うん)見返りって言う、と、あれですけども、バランスのためにね、	x	
132	*	JMB001	あ一。	NM	
131-2	*	JM0002	うん、売ってるということなんですよ。	P	
133	*	JMB001	あ一。	NM	
134	*	JM0002	ええ一。	NM	
135	*	JMB001	だけど、だんだんと逆になりますよね、多分韓国とは。	P	
136	*	JM0002	え一、そうなんですよ。	P	
137	*	JMB001	<u>うん、(え)昔の日米&lt;笑い&gt;じゃないけど&lt;2人で笑う&gt;。</u>	N	D
138	*	JMB001	多分、今度は、日韓、日中が…。	NM	
139	*	JM0002	ええ。	NM	
140	*	JM0002	や、本当はあの一、あれですよ、まあ新聞とかも出ますけどもね(はい)、その一台湾も含みましてね、台湾、日本、中国、韓国(はい)でアジア経済圏でね、関税をゼロにしてね、自由な貿易を(はい)するとかね、いうことを	P	U

			した方がね、(はい)いいと思うんですけどね。		
--	--	--	------------------------	--	--

例 4) は日韓貿易のアンバランスという話題を巡って発話している場面である。そして、発話文番号 137 では、「うん、(え)昔の日米<笑い>じゃないけど<2人で笑う>。」のように常体を用い、重い話題にジョークめかした雰囲気を作り、聞き手に愉快と感じさせて心地よく会話している「プラス・ポライトネス効果」を持たせていると言えよう。

## 6.5 対同性、対同等

例 5) 会話通し番号：188-13-JMB003-JMSa003-男男-同等

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	スピーチレベル	シフト
118	*	JMSa003	学校では吸えるんですか?<笑い>。	P	
119	*	JMB003	ん、あの一、とりあえず、吸え、吸える場所で吸ってます。	P	
120	*	JMSa003	あ、吸える場所で。	NM	
121	*	JMB003	ええ。	NM	
122	*	JMB003	《沈黙 3 秒》いや、ここも一、なんっていうか、 <u>移転してきて(ほお)結構吸える場所が限られてきて。</u>	N	D
123	*	JMSa003	あ、はい。	NM	
124	*	JMB003	だから基本的に、建物なんかは殆ど吸えないんですよ。	P	U
125	*	JMSa003	そうですね。	P	

例 5) は学校の喫煙場所について尋ねている場面である。一応「吸える場所では吸ってます」と答えたが、(発話文番号 122) 沈黙 3 秒から前の発話を修正・解釈し直すという発話行為がみられ、「移転してきて(ほお)結構吸える場所が限られてきて。」のようにダウンシフトが生じている。このダウンシフトには、聞き手が丁寧とも不愉快とも感じない「ニュートラル・ポライトネス効果」があると言えよう。

## 6.6 対同性、対目下

例 6) 会話通し番号：184-13-JMB002-JMY001-男男-目下

発話文番号	発話文終了	話者	発話内容	スピーチレベル	シフト
52-1	/	JMB002	で、なんかその、1 周 15 キロのなんか池みたいなのは、池っていうか(お一)池っていうか湖があって、それで、	x	

			それを1周するっていうのは(はい)なんかやってて(はいはい)、でもこれを2周以上<笑い>3周以上##3週弱ぐらいだ##…,,		
53	*	JMY001	3週弱ですね。	P	
52-2	*	JMB002	2周回ればいけるかなと思って(んー)、それで、まあ1周回りやつを数日やって(はいはい)、それが2周回って(はい)あつまあこれならいけるなあと思って、わあーとちょっと<2人笑い>だから…。	NM	
54-1	/	JMB002	そんであとなんかコースを下見して、チャリンコで,,	x	
55	*	JMY001	あー、はいはい。	NM	
54-2	*	JMB002	<u>で、まあこの距離かと思(んー)、でもすごい遠くて&lt;2人笑い&gt;。</u>	N	D
56	*	JMY001	でもあれなんですね、な、慣れっていう、あの、すごいあ、あるような感じがしますね。	P	U
57-1	/	JMY001	=あの一、知らない道ってうのはすごい長く感じ,,	x	
58	*	JMB002	そう<そう、そうそう><{}>。	NM	
57-2	*	JMY001	<るんですよね><{}><2人笑い>。	P	

例6)はJMY001のフルマラソンの経験について話している場面である。1周15キロで3周弱を走らなければ完走できないという話を聞いたJMB002は、「で、まあこの距離かと思(んー)、でもすごい遠くて<2人笑い>。」(発話文番号54-2)のように常体を用い感嘆の言葉を発したことから、聞き手目当て性が低いことが言えよう。また、対話相手が参加したマラソンの大変さに共感しているような表現で、互いの距離を縮めようとしている工夫がみられる。さらに、発話を伴いながら2人一緒に笑うという非言語からも、例6)にみられるダウンシフトは「プラス・ポライトネス効果」を持たせているのではないか。

## 7. おわりに

本研究では、母語場面の初対面会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトについて、「グローバルな観点」と「ローカルな観点」の2つの観点から分析した。その結果を以下の表11にまとめる。

表11 「グローバルな観点」と「ローカルな観点」からの分析のまとめ

スピーチレベルの分布			
分類	スピーチレベル (3つ)	マーカーなしを除外した	「マーカーなし」の機能

グローバルな 観 点	全 体	「基本的スピーチレベル」： 敬体 ベース側：常体が有意に多い 対話者側：敬体が有意に多い	「無標スピーチレベル」：敬体 ベース側：常体が有意に多い 対話者側：敬体が有意に多い	敬体使用率の分布が 大きく異なっている	
	男 女	対異性：敬体が有意に多い 対同性：マーカーなしが有意 に多い	対同性と対異性の敬体と常体 の使用回数に有意差がみられ ない →「マーカーなし」は男女差を 左右する要因	対同性と対異性の敬 体と常体使用の有意 差の有無に大きく関 わっている	
	上 下	対目上：常体が有意に少ない 対目下：常体が有意に多い	対目上：敬体が有意に多い、 常体が有意に少ない 対目下：常体が有意に多い、 敬体が有意に少ない →「マーカーなし」は上下差を 左右する要因ではない	対目上、対同等と対目 下の敬体と常体使用 の有意差に関わって いない	
	スピーチレベル・シフトの頻度				
	全 体	ベース側：ダウンシフトが有意に多い、アップシフトが有意に少ない 対話者側：アップシフトが有意に多い、ダウンシフトが有意に少ない			
	男 女	対同性と対異性のシフトの使用頻度に有意差がみられなかった			
	上 下	対目上、対同等と対目下のシフトの使用頻度に有意差がみられなかった			
ローカ ルな観 点	ダウンシフトの「ポライトネス効果」				
	本研究におけるダウンシフトは、「ニュートラル・ポライトネス効果」と「プラス・ポライ トネス効果」を有するが、「マイナス・ポライトネス効果」は見当たらなかった				

さらに、宇佐美（2001b）の女性ベースと本研究の男性ベースと比較対照して考察を行った（5.3 節）。その結果、スピーチレベルに関する相違点が多く観察されたと同時に、スピーチレベルのマーカーを除いたか否かにかかわらず、初対面会話では目下に対して常体を有意に多く使用していることが共通点として挙げられる。また、スピーチレベル・シフトに関しては、宇佐美（2001b）の女性ベースの使用するスピーチレベル・シフトは対話者側との上下関係と有意関係を持たれるのに対して、本研究の男性ベースの使用するスピーチレベル・シフトは対同性・対異性も対目上・対同等・対目下も有意差が認められなかったことが観察できた。

しかし、本研究の結果は男性ベースの 18 会話のみを分析して得られたことであるため、今後はデータを増やして再検証することが必要であると考えられる。



## 参考文献

- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a universal Theory of Politeness*. Tokyo: Hituzi Syobo Press.
- 李吉鎔 (2003) 「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換えー日本語母語話者と中間言語話者の比較ー」『阪大社会言語学研究ノート』5 79-96
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分けー母語場面と接触場面の相違ー」『社会言語科学』6 (2) 12-26
- 上仲淳 (2005) 「日本語日母語話者特有のスピーチレベルのシフト要因ー中国語を母語とする上級日本語学習者の接触場面からー」『社会言語科学会第 16 回大会発表論文集』160-163
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生起の条件と機能ー」『学苑』662 27-42
- 宇佐美まゆみ (2001a) 「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」国立国語研究所編『談話のポライトネス』凡人社 9-58
- 宇佐美まゆみ (2001b) 「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能ー敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆することー」『語学研究所論集』6 1-29 東京外国語大学語学研究所
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネス理論の展開」『月刊言語』31 (1-13) 大修館書店
- 宇佐美まゆみ (2008) 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」西原鈴子・西郡仁朗編『講座社会言語科学 第4巻教育・学習』ひつじ書房 150-181
- 宇佐美まゆみ (2015) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2015 年度版」<https://ninjal-usamilab.info/pdf/btsj/btsj2015.pdf>  
最後アクセス:2019/11/24
- 宇佐美まゆみ監修 (2018) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2018 年版』国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー: 宇佐美まゆみ)
- 宇佐美まゆみ (2019) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2019 年改訂版)」『語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的な研究』平成 30 年度～令和 4 年度 科学研究費補助金基盤研究 (A) -課題番号 18H03581 (研究代表者: 宇佐美まゆみ)
- 佐藤勢紀子 (2000) 『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構 平成 10 年度～平成 11 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書』1-36
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析ー初対面コミュニケーションの姿としくみー』くろしお出版